

Title	計画5-1 丹沢東北山塊におけるニホンザルの生息と人間活動の影響(VI 共同利用研究 2.研究成果)
Author(s)	福田, 史夫
Citation	霊長類研究所年報 (2002), 32: 92-92
Issue Date	2002-08-27
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/165788">http://hdl.handle.net/2433/165788</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

いた。これまでの霊長類における深指伸筋の調査では、ワオキツネザルでは第1～3指に見られ、各指とも2つの小筋束とその停止腱が観察された。ニホンザルでは第1～3指に見られたが、第1指は長母指伸筋として独立し、第2,3指の深指伸筋は一体の筋腹からの各腱として第2,3指に終わっていた。ヒトでは深指伸筋として一般に、長母指伸筋と示指伸筋がそれぞれ単腱にて認められる。しかし、変異として、第3指に停止する深指伸筋、各指の伸筋に筋束や腱の重複化や、短指伸筋化した筋束が観察された。以上の所見から、深指伸筋の分化は霊長類の系統発生において1) 尺側の指の深指伸筋から単純化あるいは消失する傾向にある。2) ヒトにおいて確認された深指伸筋系の変異型は霊長類各種に見出される伸筋の出現形態に類似することが明らかになった。

#### 計画 5-1 丹沢東北山塊におけるニホンザルの生息と人間活動の影響

福田史夫 (共立薬大)

丹沢東北山塊 (神奈川県津久井町) には、周年を通して農耕地に出没する群れと全く農耕地には出沒しないで山地で生活している群れが存在する。農耕地に出没する群れ (南山群) は、20 年以上前には秋には農耕地・集落周辺に植栽されているカキの実を採ることが知られていた。当時は住民の姿を見ればすぐ逃げたようだ。しかし、1970 年代に入ってから進められた宮ヶ瀬ダム工事により生息域の南部が狭められたため、80 年代後半には津久井町鳥屋地区の分断するように走る県道を渡って北西の仙洞寺山の方まで行動域を拡大し始めた。このため、農業被害が日常化した。と同時に個体数も増加し始めた。さらに、市街化区域であるため銃器を用いての追い払いができないため、人を恐れなくなった状態が続いている。一方、その西の隣接群とも言える馬の背群は、彼等の行動域の東方 500m には人家や農地もあるが、まったく猿害をおこなさないばかりか、人に出会えばすぐ警戒音を発して逃げてしまう。この群れの接近オスの中には南山群に追従して水田で稲を食べていた個体さえ存在するのである。

これら 2 群の人や農作物に対する行動上の大きな違いは、彼等の生息域内が猟区であるか否かに基づいていると確信される。

#### 計画 5-2 白神山地におけるニホンザルの群れ分布の把握

揚妻直樹 (北海道大  
・北方生物圏・苫小牧研究林)

2001 年 12 月に主に秋田県側白神山地の 9 市町村に

おいてルートセンサスを行い、サルおよび雪上の足跡の発見に努めた。サルおよび足跡を発見した場合にはその日時と場所を記録した。調査地には 3 群のサルに発信機がついていたので、これらについては、テレメトリー法による位置探査も行った。その結果、サルを 12 回直接観察し、サルの足跡を 67 箇所で見出すことができた。このうち、複数頭および複数列の足跡が 48 例あった。また、テレメトリー法により、群れの位置を 17 回探査した。複数頭であった場合をサルの集団とみなし、隣接して得られた集団の情報については、同じ日の情報では 1km 以上、1 日隔たった情報では 2km 以上、2 日隔たって情報では 4km 以上、3 日以上隔たった情報では 5km 以上離れていた場合、それらは異なる集団の情報であると判断した。この基準に照らすと、調査地域には 21 集団が生息していることが示唆された。このうち 11 集団については集団サイズや未成熟個体の存在から群れであると考えられた。集団情報が得られた地点を最外郭で囲み、そこから青森県部分と海岸部を差し引いて生息地面積を求めたところ 316km<sup>2</sup> となった。前年 12 月に行った同様の調査結果とあわせて分析したところ、秋田県側白神山地に生息するサル集団数は 29-35 集団 (そのうち少なくとも 7 割は群れ) であり、生息地面積は最外郭法で 518km<sup>2</sup> と推定された。

#### 計画 5-3 屋久島の永田地区周辺のニホンザルの猿害群の採食生態

デビッド=ヒル (京都大・理  
・招へい外国人学者)

屋久島では集落周辺の柑橘類果樹園での収穫期の猿害が深刻であるが、猿害のない時期の加害群の生態については、ほとんど知られていない。本研究は、集落周辺のサルの自然食物植物の利用可能性と、調査地域で遭遇するサルの群れの構成、行動や食性や利用地域についての猿害群の生態について明らかにすることを目的とした。本年度は計画の 2 年目にあたる。

2001 年の 7 月と 8 月の非収穫期に、収穫期には猿害の激しい永田集落周辺で、森林での自然のサルの食物の利用可能性を調査した。集落と果樹園や二次林の間のおおる道路 3.3 km の区間で、道路の両側の植生を、100m ごとに 33 区画分記録した。同じ区間で 10 時から 12 時までサルを探索した。25m 幅の区画を 10 区画えらび、二次林内のサルの食物種の植物の密度調査をした。その結果、二次林は半分以上の区画に自然回復中の森として普通にあり、成熟した二次植生を支えていること、また、畑と果樹園が二次林について頻度が高いこと、サルの活動の証拠は、アカメガシワの種子食で、12 調査日のうち 10 日間確認した。直接観察からは、永田川をはさんで、両